

傾向を表す接尾辞の分析

－ガチとギミ（再考）－

Analysis of suffixes expressing tendency:

Reconsidering 'gachi' and 'gimi'

井 上 次 夫

要 旨

従来、傾向を表す接尾辞としてガチとギミは、ヤスイやキライ、ッポイ、ゲ等とともに分析され、その接続・意味・用法が記述されている。本稿では、それら先行研究の成果について現代日本語の大規模コーパスを用いながら再検討を行い、その記述内容の精度を高めた。そして、ガチとギミはともに逸脱性に基づく傾向を表すが、ガチの特徴は主に頻度傾向、客観的表現、仮名表記にあり、ギミの特徴は主に状態傾向、主観的表現、漢字・仮名表記の併用にあることを示した。

キーワード：接尾辞、ガチ、ギミ、傾向、日本語コーパス

Abstract

Traditionally, we have analyzed 'gachi' and 'gimi,' two suffixes expressing tendency, together with suffixes such as 'yasui,' 'kirai,' 'ppoi,' and 'ge,' in order to describe their joining, meaning, and usage. This paper primarily uses a large-scale modern Japanese language corpus to re-evaluate the results of such prior studies and improve the accuracy of these descriptions. Analysis is conducted mainly from the perspective of appropriateness of taking examples, as well as frequency-related versus state-related tendency, objective versus subjective expressions, and written form.

Key Words : suffixes, *gachi*, *gimi*, tendency, Japanese language corpus

1. はじめに

接尾辞の「がち・勝ち」（以下、ガチ）と「ぎみ・気味」（以下、ギミ）は、主に動詞や名詞に接続して、その内容の傾向や気配があることを表す。両者については、これまで森田（1980）以降、井上（1997・1998）、グループ・ジャマシイ（1998）、小池他（2002）、八尾（2006）等において一定の研究成果を見ることができる。しかし、それらの内省を中心とする質的研究を日本語コーパスのデータから見ると、意味、接続、用法等における記述の妥当性が確認される一方で、記述の不足や疑問点が存在しないわけではない。

そこで、井上（2013）を受けた本稿では、先行研究の記述内容について主に量的側面に着眼し、改めて確認すべき点や問題点を取り上げる。そして、日本語コーパス調査のデータを用いてそれらの点を検討し、ガチとギミの内実についての記述の精度を高めることを目的とする。

以下、2章では先行研究を概観する。そして、3章ではガチとギミの接続、前方要素・後方要素、活用形式について、4章では頻度と状態、逸脱性と主観性・客観性の観点から傾向の意味について、5章では表記や挙例について検討し、6章でまとめを行う。

2. 先行研究

類義語研究の先駆的業績の一つである森田（1980）は、ガチは「動詞の連用形やある種の名詞に付いて、あるアブノーマルな状態にややもすればなっていく傾向にある意を添える」接尾語（名詞的）とする。一方、ギミは、「風邪ぎみ」「ふとりぎみ」を例に挙げて「そのような傾向にある」の意を添える接尾語とした。次に、両者が表す語彙的意味について、ガチは「ある状態に置かれた場合には、ややもすればそうになってしまう恐れがある」「現状がある状態のほうに傾きやすい状況にある」「そうはまだなっていないのだが、しばしばその状態に移っていく傾向にある」の意を添える、つまり「そうでないものがそうになっていく性質を内在させている（例：曇りがちの空）」と記述している。これに対し、ギミは「現在そのような傾向・状態が幾分か現れている」の意を添える、つまり「そのような徴候が外在していると話し手は判断している」「あくまで話し手の主観としてその徴候ありと判断し、好ましくないマイナス状態の傾向ととらえている（例：電池が切れてきたとみえて、時計は遅れぎみだ）」としている。

要するに、ガチはある状況・状態をノーマル（正常）とアブノーマル（異常）の対立で捉え、ノーマルからアブノーマルへの移行に着眼し、現在、アブノーマルには至っていないことを表す傾向表現であるの対し、ギミはそのようなノーマルとアブノーマルの対立といった含意はなく、アブノーマルな状況・状態にあるという点にのみ着眼し、現在、その状態に至っていることの判断を表す傾向表現なのである。そして、両者はいずれもあるアブノーマルな状況・状態に関する言及であるため、それをマイナス、つまり好ましくないものと捉えている点で共通しているということになる。

それ以降、広瀬・庄司（1994）がそれに追随しているが、井上（1997）は補助形容詞「やすい」を分析する中で、ガチをヤスイとスギルの中間に位置付けるとともに、「傾向」の構成要素として「反復性」「頻発性」「逸脱性」の3点を指摘した。そして、これを受けた井上（1998）では、ヤスイにガチとギミを加えて分析し、傾向表現としての体系と構造を明らかにすることを試みている。

また、田・泉原・金（1998）はガチについて「主観的マイナス評価の状態・傾向・可能性・恐れ・危険・嫌いが50%以上あることを表す。意志動詞に付かないときは『～やすい』とほぼ同じ意味〔論者注：客観的なマイナス評価の傾向〕を表す」と述べるが、ギミについての言及はない。

一方、グループ・ジャマシイ（1998）は、文型を文や節の意味・機能・用法に関わる形式という枠組みで捉える立場からガチとギミについて次のように記述した。

Nガチ：名詞に付いて（例：病気がち、曇りがち）、「その名詞が表す状態になりやすい、その性質がかなりある」という意味を表す。その状態がふつうの状態とは異なる場合、マイナス評価を受けるような場合に用い、語彙的には限られている。「遠慮がち」「伏し目がち」は慣用句。

R-がち：動詞に付いて（例：忘れがち、食べ過ぎてしまいがち）、「意図しなくてもついそうしてしまう」という意味を表す。マイナス評価されるような動作について言う。「どうしても・つい・うっかり」などの語や、「てしまう」などととも用いられることが多い。「ありがちな」は「よくある」の意。

ギミ（Nギミ・R-ギミ）：（例：緊張気味、やや下がり気味）「そういう様子である。そういう傾向にある」という意味を表す。よくないことがらの場合が多い。

このように、名詞（N）と動詞の連用形（R-）への接続を区別してガチとギミの説明を整理する点は有益であるが、確認しておきたい点がないわけではない。この後、小池他（2002）が傾向表現（*expression of tendency*）の中に傾向接尾辞の項を立ててガチ・ギミ・ヤスイを取り上げた。そこでは、ガチは好ましくない傾向を示す場合が多いが、必ずしも好ましくない傾向とは言えないものもあるとして、「遠慮がちに・伏し目がちに・黒めがち」を例に挙げている。また、ガチとギミの相違点は、ガチが量的に多い傾向であるのに対し、ギミは量的には少ないが兆しを見せる傾向であるとして一義的に「量」の多寡に意味の区別を認めているが、判然としない。

それから、八尾（2006）が改めてガチとギミをヤスイとともに取り上げた。ここでは「傾向」の意味について「性質や状態、または反復して起こることに関して、それが話し手の持つ基準から逸脱していること」とし、ガチの意味は「頻繁にそうなる、そうすることが多い」ということであり、機能としては「前接要素のイメージに関係なく、積極的にマイナスイメージを付加する、話し手の評価的な態度」を表すとした。これに対し、ギミの意味は「事例の多さを表すことはなく、もっぱら（一時的な）状態の傾きを表す」のであり、「マイナスイメージを積極的に表す機能」はないとする。さらに、ギミには「話し手が断定を避け、語気を和らげようとする態度を表す機能^{註1}」があり、これはガチとヤスイには認められないギミ特有の機能であるとしたが、この語気の和らげ機能については後に検討したい（4.2）

以上のように、ガチとギミは比較・分析されながらその内実が明らかとなってきているが、なお検討を要すべき点が残されていると思われる。以下では、それらについて検討する。

3. 接続・前後文脈・活用形式

3.1 接続

ガチとギミの接続についてみると、森田（1980）ではガチの場合、動詞（連用形）と名詞以外への接続に関する記述がなく、ギミの場合は接続そのものが取り上げられていなかった。また、井上（1998）ではギミの場合、副詞への接続に言及がなく、助動詞に接続しないとしていた。しかし、八尾（2006）はそれらの不備を補う形で次のように具体的に記述している。

ガチ：一部の名詞、動詞連用形、テシマウなどの補助動詞、態を表す要素（ラ）レル、（サ）セルに接続して、全体でナ形容詞あるいは名詞を作る。

ギミ：名詞、動詞連用形、態の助動詞、一部の情態副詞に接続し、ナ形容詞、または名詞を作る。ガチに比べ、名詞への接続が豊富である。しかし、「岩」「山」などへの接続はなく、主に一時的な情態やある方向への動きを含意した名詞への接続である。

上記の内容を補足すると、ガチが接続する「一部の名詞」とは「黒目・伏し目・雨・岩・山」等の純粹名詞を指すと思われるが、ほかに「名詞」として「不足・停滞・興奮・孤立・便秘・自嘲」等の漢語サ変動詞語幹（以下、サ変語幹）が挙げられるだろう。また、ギミが接続する「一部の情態副詞」の例としては「あっさり・ぐったり・ゆったり」等が挙げられる。

次に、グループ・ジャマシイ（1998）では、接続について名詞（N）と動詞の連用形（R-）を取り上げるにとどまっている。また、ガチについては「どうしても・つい・うっかり」や「てしまう」等とともに用いられることが多いと記述したのに対し、ギミについてはそのような前方要素に関する情報の記述が見受けられない。それから八尾（2006）においては、ギミの接続に関して「ガチに比べ、名詞への接続が豊富である」との記述があるが、ガチについてはそのような前方要素に関する情報の記述が見受けられない^{#2}。

そこで、それらの点を解決することを目的に、ガチとギミの両者における前方要素と後方要素に関する調査を行うこととした。調査に使用したのは国立国語研究所「現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ2009）」で、特に断らない限り、データは以下これによる。

3. 2 前後文脈

3. 2. 1 前方要素

(1) 前接語の品詞

最初に、前方要素としてガチとギミが接続する語（前接語）の品詞について調査を行ったところ、前接語の品詞は名詞・動詞・助動詞・副詞の4種類であった。表1、図1にその出現率を示す。

表1 ガチ・ギミの前接語（品詞）

	名詞	動詞	助動詞	副詞	計
ガチ	184(12.3%)	1,088(72.6%)	224(14.9%)	0(0%)	1,496
ギミ	306(61.1%)	183(36.5%)	11(2.2%)	2(0.4%)	501

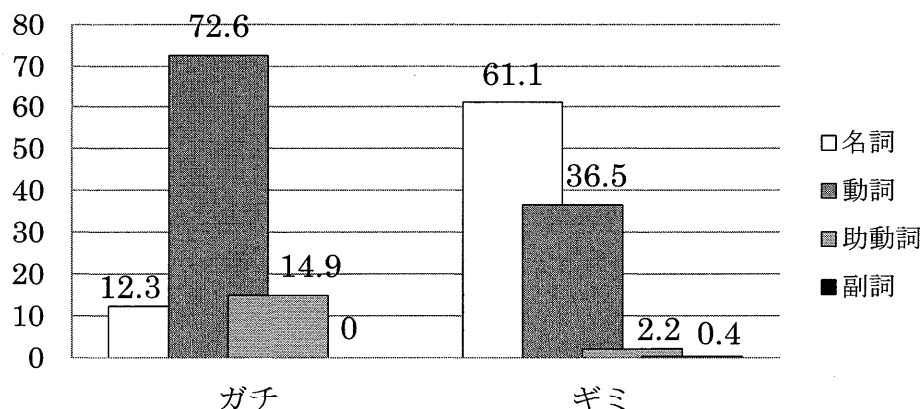


図1 ガチ・ギミの前接語 (品詞) 単位 %

この結果から、八尾 (2006) における、ガチが一部の名詞、動詞連用形、態を表す要素 (ラ) レル、(サ) セルに接続すること、ギミが名詞、動詞連用形、態の助動詞、一部の情態副詞に接続すること、そしてギミがガチに比べ名詞への接続が豊富であるといった記述内容が実証される。

(2) 前接語の具体例

次に、ガチとギミの前接語の具体例はどのようなものであるか、使用率順に表2に示す。

表2 ガチ・ギミの前接語 (使用率上位語)

ガチ (1,496 例)			ギミ (501 例)		
順位	前接語	語数 (%)	順位	前接語	語数 (%)
1	なる	225 (15.0)	1	不足	21 (4.2)
2	しまう	105 (7.0)	2	興奮	20 (4.0)
3	ある	81 (5.4)	3	停滞	14 (2.8)
4	遠慮	76 (5.1)	4	太る	14 (2.8)
5	病気	37 (2.5)	5	便秘	13 (2.6)
6	ためらう	34 (2.3)	6	疲れる	12 (2.4)
7	考える	28 (1.9)	7	自嘲	11 (2.2)
8	遅れる	26 (1.7)	8	貧血	11 (2.2)
9	忘れる	24 (1.6)	9	遅れる	11 (2.2)
10	伏し目	13 (0.9)	10	緊張	7 (1.4)

この結果から、ガチは「なりがち、しまいがち、ありがち、遠慮がち」の語が多用され、前接語の品詞としては動詞が多いこと、ギミは「不足ぎみ、興奮ぎみ」の語が多用されており、前接語にサ変語幹 (名詞) が多いことが確認される。また、グループ・ジャマシイ (1998) におけるガチが「てしまう」とともに用いられることが多いという記述、八尾 (2006) におけるガチが「テシマウなどの補

助動詞」に接続すること、ギミが主に一時的な状態やある方向への動きを含意した名詞へ接続するといった記述内容が実証される。

(3) 前文脈の共起語

小池他(2002)では、傾向表現は物事の頻度と密接に関連するため、頻度副詞や反復副詞を用いた表現の多くは傾向表現となるとして「日本人の学生はLの発音とRの発音をよく間違える(間違えがちだ。)」 「大柄な人はしばしば猫背になる。(なりがちだ。)」を例に挙げている。このように傾向表現は頻度や反復を表す副詞(よく・しばしば)、また無意識・無意図・不注意を表す副詞(つい・うっかり)と共起することが多いと考えられる。

そこで、ガチとギミの前文脈における共起語(副詞類)について調査を行った。その結果、前文脈においてガチと共起することが多いのは表3のような語句であった。

表3 ガチ・ギミの共起語(副詞類)

ガチ (1,496 例)			ギミ (501 例)		
順位	共起語	語数 (%)	順位	共起語	語数 (%)
1	つい・ついつい	58 (3.9)	1	やや	38 (7.6)
2	とにかく	58 (3.9)	2	少し	22 (4.4)
3	どうしても	48 (3.2)	3	ちょっと	14 (2.8)
4	ともすれば類	43 (2.9)	4	少々	6 (1.2)
5	しばしば	9 (0.6)	5	いささか	6 (1.2)
6	往々にして	8 (0.5)	6	幾分	6 (1.2)
7	えてして	5 (0.3)	7	多少	6 (1.2)
8	うっかり	3 (0.2)	8	むしろ	4 (0.8)

この結果から、グループ・ジャマシイ(1998)におけるガチが「どうしても・つい・うっかり」とともに用いられることが多いという記述内容が実証される。しかし、日本語教育の現場での指導上、使用頻度を重視するならば、使用頻度が上位の「とにかく」を加えて挙げておきたいところでもある。また、ギミについてもガチの場合と同様に共起語として使用頻度が上位の「やや、少し、ちょっと」等を挙げておくことが望まれるところである^{註2}。

3. 2. 2 後方要素

(1) 順接・逆接の接続助詞

ガチとギミの後方要素として、ここでは複文を取り上げ、順接(カラ・ノデ・タメ)と逆説(ガ・ケレド類^{註3}・ノニ)の接続助詞の出現状況について調査を行った。表4、図2に結果を示す。

表4 ガチ・ギミの後方要素（順接・逆接の接続助詞）

	順接	逆接	計
ガチ	81(27.5%)	214(72.5%)	295
ギミ	19(51.4%)	18(48.6%)	37

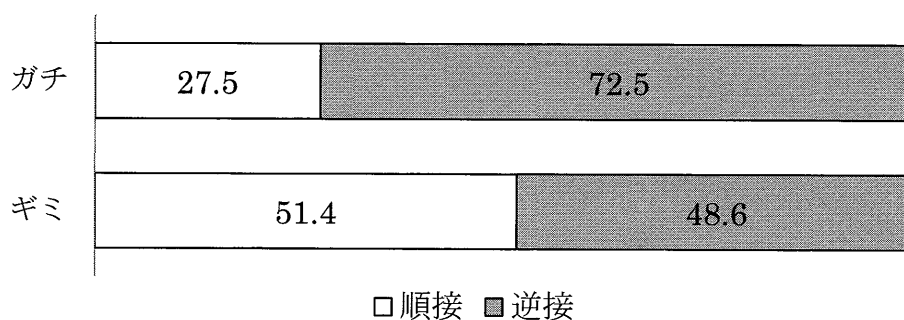


図2 ガチ・ギミの後方要素（順接・逆接の接続助詞） 単位 %

この結果から、文脈上、ガチの場合、後方要素は順接よりも逆接の接続助詞が高い比率で出現することがわかる。一方、ギミの場合、順接と逆接の接続助詞のいずれかへの大きな偏りは見受けられない。次に用例を示す。下線は論者、以下同じ。

- (1) 前の母親は病気がちだったから、あんまりごはんを作ってくれなくて店屋物とか…
(「子どものトラウマと心のケア」)
- (2) テレビを見ていると、衿子が帰ってきた。「今日は水炊きにするわ。風邪気味だからあたたかいものいいでしょう。」衿子はそういうながら、
(「愛のごとく」)
- (3) 名前だけ聞くと凶悪なゲリラ隊長を想像しがちだが、実際はその反対らしい。
(「男たちの伝説」)
- (4) 訴えかけるような自己表現は、見かけではそうするだけで表現欲求が満たされるように考えられがちであり、その側面があることも確かだが、それは受けとめてもらえる表現相手と場面があってこそ成立するのである。
(「国語教育を学ぶ人のために」)
- (5) 身体も緊張ぎみだったが、次第にほぐれて、心地好さが身体に満ちてきた。(「髑髏皇帝」)
- (6) いささか挑発気味だが、私は思いきって本心を切り出すことにした。
(「北朝鮮秘密集会の夜」)

上の(1)(2)は順接の用法の例である。(1)では前の母親が食事を作らなかった理由として、その母親が「病気がちだった」ことを挙げている。また、(2)では主人公の体には温かいものいい理由として、主人公が「風邪気味」であることを挙げており、両者に用法上の差異は認められない。

一方、(3)~(6)は逆接・前置きの用法の例である。(3)は名前から「想像しがち」なイメージに対して実際との食い違いを述べている。(4)は見かけ上、訴えかけるような自己表現が表現欲求の充足と

して「考えられがち」であることを認めたととしても、その条件となる表現相手と場面が重要だと反論している。また、(5)は身体の「緊張ぎみ」だった状態が消えて心地よさへと変化したことを表現している。なお、(6)は「挑発気味だが」と断りを入れている前置きの用法である^{註4}。

これらの用例の分析からは、後続文脈に順接の接続助詞が現れる場合、ガチとギミは意味・用法において差異は認められない。しかし、逆接の接続助詞が現れる場合、ギミの場合、前件の叙述内容とは反対の異なった状態・状況が後件に述べられている。これに対し、ガチでは前件の叙述内容は、後件で覆すことを前提とした上での内容である。実際、ガチが使用されている典型的な構文を見ると、前件では通常のありふれた事態や状態、一般的な出来事や見解、無意識に陥りやすい表面的な考え方等を叙述し、それに逆接の接続助詞を付加し、さらに「実際は」「実は」等を使用して表現主体の見解や主張、真実や本質的な内容を叙述する形式を取っている。

以上から、次のことが明らかになったと思われる。まず、前方要素の検討から、ガチには前接語の意味する語義内容（コト・サマ）に主体の意図の有無にかかわらず至る傾向や頻度・反復を表す副詞類（例：つい、とにかく、どうしても、ともすれば、しばしば）が共起することが多いのに対し、ギミには前接語の意味する語義内容（サマ）が低い程度ながらも確かに見られることを表す程度副詞（例：やや、少し、ちょっと、いくぶん）が共起することが多い。

次に、後方要素の検討から、ガチは逆説・前置きの用法（例：ガ、ケド、ノニ）が多く後続する点が特徴的である。これは、ガチが前件の叙述内容に対してマイナス評価を行った上で、後件でそれを否定する内容の主張・意見の表明や事実の説明を行う文脈で多く使用されていることを示している。一方、ギミにはそのような特徴は見られない。両者の典型的な用法と用例を次に示す。

(7) つい+動詞+ガチ+逆接、+実際は^{註5}

（源義経は）非常に人気があり、若い女性ファンも多いところから、つい美男子を想像しがちだけれど、実際には、美男子とはほど遠い顔をしていたらしい。（「義経の首」）

(8) やや+名詞+ギミニ

ところが、その数日後です。「先生、あのことが実際にそうになりましたよ」と、その人がやや興奮気味に話してくれました。（「わが愛はやまず」）

(2) 活用形式

井上（1998）は、ガチ、ギミ、ヤスイの傾向の語彙的意味を明らかにする目的から述語と連体修飾の成分に限って分析を進めた。これに対し、八尾（2006）では連用修飾成分として付帯状況を表す形式を加えた意味的機能の分析を行っている。

そこで、ここではガチとギミの後方要素として、活用形式の使用状況を調査した。扱った形式は、両者に助動詞ダと助詞ノが接続したもので、ガチダ・ガチデ・ガチニ・ガチナ・ガチノ、ギミダ・ギミデ・ギミニ・ギミナ・ギミノのそれぞれ5形式である。表5、図3に結果を示す。

表5 ガチ・ギミの活用形式（使用状況）

	～ダ	～デ	～ニ	～ナ	～ノ	計
ガチ	219 (14.6%)	596 (39.8%)	212 (14.2%)	415 (27.7%)	54 (3.6%)	1,496
ギミ	55 (11.0%)	135 (26.9%)	171 (34.1%)	35 (7.0%)	105 (21.0%)	501

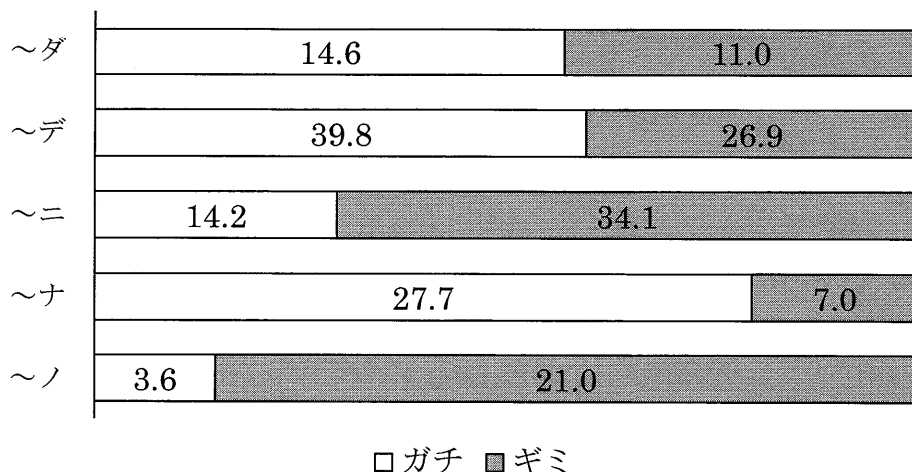


図3 ガチ・ギミの活用形式（使用状況） 単位 %

この結果から、それぞれの使用率が高い形式は連用修飾成分のガチデ（39.8%）、ギミニ（34.1%）、ギミデ（26.9%）であり、連体修飾成分となるガチナ（27.7%）^{註6}・ギミノ（21.0%）であることがわかる。この点で、八尾（2006）が「路地にでたとき、厚子が遠慮がちに話しかけた。」のような付帯状況のガチニを意味的機能の面でギミニと共通するところがあると注目したことは妥当だと言える。

4. 傾向の意味

4.1 頻度傾向と状態傾向

4.1.1 傾向の構成要素

井上（1997）は、補助形容詞「やすい」が容易性と傾向を表すことの分析を通して、ヤスイの「容易性」から拡張した「傾向」の意味を「あるモノの状態・属性およびコトがある方向に向かっているようす（サマ）」と定義した。そして、「傾向」を反復性と頻発性を有する「頻度傾向」と状態変化を有する「状態傾向」に分類した上で、両者は傾向すなわち傾きである以上「逸脱性」を共有するものであり、それは通常とは異なって目立っているという点で「際立ち度」として捉えられるものであると考え、その関係を図4に示した。

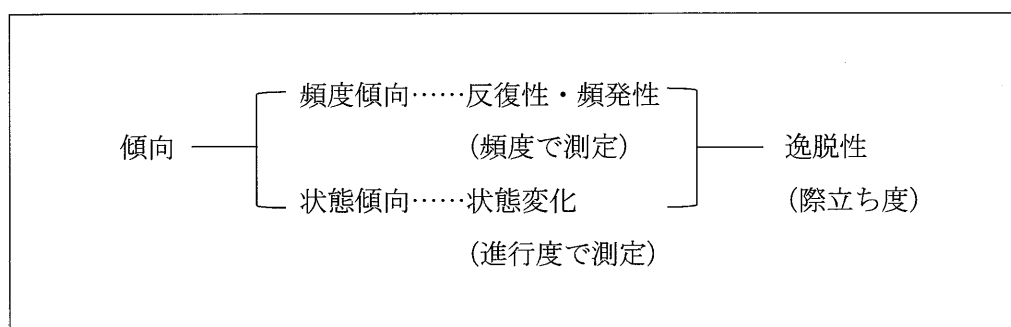


図4 「傾向」の構成概念モデル

既に述べたように(2.)、これを受けた井上(1998)では、補助形容詞「やすい」にガチとギミを加え、傾向表現としての体系と構造を明らかにすることを試みた。そして、ガチとギミが表す「傾向」について検討した結果を次のように整理している。

(9) ガチ：事態・コトの頻度傾向を表す。反復・頻発性を有する動的で客観的な表現。

例) 遅れがち、病気がち、興奮しがち

(10) ギミ：状態・サマの状態傾向を表す。短時日の持続性を有する静的で主観的な表現。

例) 遅れぎみ、風邪ぎみ、興奮ぎみ

以下では、上の記述内容について、新たな観点を加えながら再検討する。

4. 1. 2 反復・頻発性と持続性

まず、ガチの「反復・頻発性」とギミの「短時日の持続性」について、ここでは共通する前接動詞「遅れる」(表2)を例に取り上げて検討する。

BCCWJ2009及び『聞蔵』^{註7}での調査によると「遅れがち」の主語は「開花・改善・改定・対応・入金・配本・発見・発表」等であり、そこでは一定の基準・期日に対して進行が遅くなるという「事態・コト」が複数回、重なって生じているという反復・頻発性を有する「頻度傾向」を表している。これに対し、「遅れぎみ」について、その主語をみると「開花・色づき・計画・行程・準備・生育・初雪・予定」等であり、そこでは一定の基準・期日に対して進行度が遅いという「状態・サマ」が続いて生じているという持続性を有する「状態傾向」を表している。

すなわち、動詞「遅れる」の例のように、後接するガチは進行が遅くなるコトの「反復・頻発性」を表し、後接するギミは進行度が遅いサマの「持続性」を表すことが確認される。

4. 1. 3 動的と静的

次に、先の(9)(10)の記述にあるガチの「動的」とギミの「静的」について、ここではガチとギミが接続する受身の助動詞、名詞の種類から検討する。調査結果を表6、図5に示す。

表6 ガチ・ギミの前接語（受身・名詞）

	受身	純粹名詞	サ変語幹
ガチ(1,496例)	226 (15.1%)	35 (18.8%)	151 (81.2%)
ギミ(501例)	11 (2.2%)	122 (39.9%)	184 (60.1%)

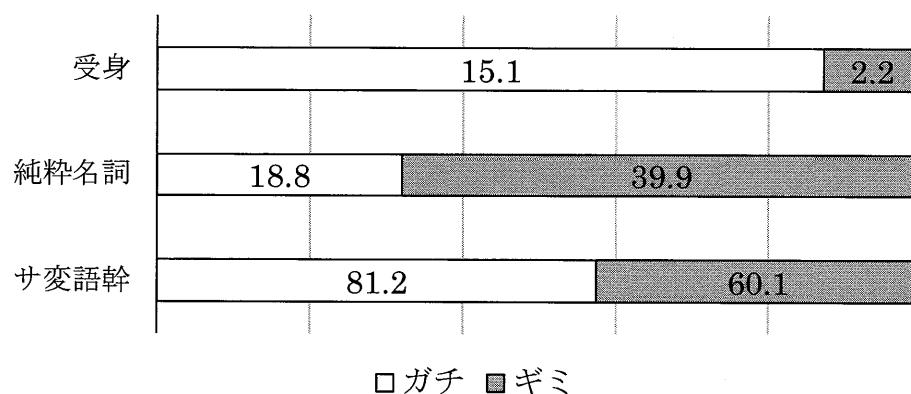


図5 ガチ・ギミの前接語（受身・名詞） 単位 %

日本語の受身には自動詞に受身の助動詞レル・ラレルが接続する被害の受身が存在するが、一般的な受身は他動詞に受身の助動詞が接続している。このため、受身の助動詞に接続する比率が高ければ接辞を含む成分の意味は〈他動詞性〉が強く、比率が低ければ〈他動詞性〉が弱いものと考えられるだろう。そこで、上の表6、図5で、受身に接続する比率をみるとガチがギミよりも高いことがわかる。すなわち、ガチはギミよりも〈他動詞性〉が強く、この意味でガチは「動的」、ギミは「静的」とすることには根拠があると言える。

さらに、前接名詞を純粹名詞とサ変語幹とに区別してみると、純粹名詞よりもサ変語幹に接続する比率が高ければ接辞を含む成分の意味は〈行為性〉が強く、比率が低ければ〈行為性〉が弱いものと考えられるだろう。そこで、表6、図5をみると、サ変語幹に接続する比率はガチのほうがギミよりも高いことがわかる。すなわち、ガチはギミよりも〈行為性〉が強く、この意味でガチは「動的」、ギミは「静的」とすることには根拠があると言える。

4. 1. 4 主観的表現と客観的表現

ここでは、先の(9)(10)の記述にあった「主観的な表現」と「客観的な表現」に関し、主観性・客観性が逸脱性とどのように関係するかを再検討する。

まず、逸脱性とは、井上（1997）によれば、例えば、額縁が水平状態から左右のどちらかに下がっている、ビリヤードの15球が卓上に不規則に散らばるのではなく10球が右隅に寄っている、交通事故死者数が前年に比べて増加し続けている、感熱紙に印字した文字が時間の経過とともに薄くなり消えていくといった例のように、通常、正常とされる状態から外れていることや状態をいう。この正常からの逸脱は、一般的には異常として捉えられ、それゆえに好ましくない状況・状態として受けとめられるであろう。しかし、本来的に傾向は逸脱状態に基づくのであり、上述のビリヤードの例から明ら

かなように必ずしも好ましくないというわけではない。この意味で、逸脱性は森田（1980）におけるアブノーマル（異常）な状況・状態に相当すると言えるが、マイナスの評価性は必ずしも固有のものではなく、文脈上、臨時的に有する評価の態度にすぎない。前出の小池他（2002）参照（2.）。

さて、その逸脱性の有無の判断、すなわち逸脱状態か否かについては、大きく主観的判断と客観的判断が関与する。そこで、以下、ガチとギミの主観性・客観性に関する先行研究の記述についてみていくことにしよう。

主観性については、森田（1980）ではガチが「そうはまだなっていないのだが、しばしばその状態に移っていく傾向にある」ことを表すのに対し、ギミは「現在そのような傾向・状態が幾分か現れている」「そのような徴候が外在していると話し手は判断している」ことを表すことから、ある事態（コト）や状態（サマ）が現実世界に出現しているか否か、あくまで話し手の判断によるものか否かがガチとギミの区別に大きく関与する。このことから判断すると、ギミには話し手の判断が関与するため、主観性を認めることができる一方、ガチには客観性を認めることができることになる。

次に、井上（1998）では「戦争中、母は忙しくて疲れがちだった。」と「[?]戦争中、母は忙しくて疲れぎみだった。」や「小学生時代、次郎はとかく学校に遅れがちだった。」と「^{*}小学生時代、次郎はとかく学校に遅れぎみだった。」の分析から、ギミが時間の相対的長さを表す副詞句や過去のテンスと共起しないことを根拠に、ギミは一定の短時日におけるその状態の持続を表し、話し手の発話時現在における判断を述べるものであり、その結果、主観性を有するとした。これに対し、ガチは時間やテンスの制約を受けないこと、またガチは「母は風邪を引きがちだ」と「^{*}母は風邪を引きぎみだ」の例から分かるようにヲ格構文を取ることから客観性を有すると説明している^{註8}。

以上から言えることは、逸脱性を主要な構成要素とする傾向は、その逸脱性に対する客観性に基づく判断を表すガチという客観的な表現をとる場合と主観性に基づく判断を表すギミという主観的な表現をとる場合に分かれるということである。つまり、頻度傾向は客観性・客観的表現、状態傾向は主観性・主観的表現と結びつきやすい関係にある。言い換えれば、頻度傾向という事態・コトは客観的に捉えられやすく、状態傾向という状態・サマは主観的に捉えられやすいのである。

このことはまた、ガチとギミの活用形式（図3）のうち連用修飾成分となるギミニの使用率が高いことが傍証になるのではないかと思われる^{註9}。通常、様態を表現する際には客観的表現よりも話し手の主観に基づく表現となりやすいと考えられるからである。

次項では、ギミに語気の和らげ機能を認める八尾（2006）を取り上げ、状態傾向を表すギミが有する主観性・主観的表現の観点から検討する。

4. 2 語気の和らげ機能と主観的表現

八尾（2006）は、既に触れたように、付帯状況のガチニが意味的機能の面でギミニと共通するところがあるとしてガチニを加えた分析を行い、その成果の一つとして、ギミには語気の和らげ機能（話し手が断定を避け、語気を和らげようとする態度を表す機能）があるのに対し、ガチにはその機能がないとした（2.）。ここでは、ガチニとギミニの使い分けを区別する説明として語気の和らげ機能が必要となるのかについて、主観的表現の観点との関係から検討する。

(11) Xさんは遠慮がちに質問した。

(12) Xさんは遠慮気味に質問した。

八尾(2006)は、(11)が「中立的な状態に比べると明らかに『遠慮』の様子が認められる」のに対し、(12)は「はっきり『遠慮』と言えるほどではないが、遠慮に近い様子が現れている」ことを表すとする。そして、ギミには断定を避けて語気を和らげようとしている態度、和らげの態度が示されているのに対し、「遠慮がち」のガチにはそのような和らげの態度はないのだという。

いま、もし森田(1980)に従えば、ガチはその状態に至っておらず、ギミはその状態に至っている判断を表すものであるから、(11)「遠慮がち」には「中立的な状態に比べると明らかに『遠慮』の様子が認められる」という説明は矛盾することになる。しかし、実は八尾(2006)では「遠慮・伏し目」に接続した場合はある傾きが現状に現れていることを例外的に表すとしているため、問題とすべきでないかもしれないが、なぜ例外となるのかについては疑問が残る。

また、(11)と(12)の区別について、どうしても語気の和らげ機能の観点を取り立てて説明することが必要なのであろうか。むしろ、(11)が客観的表現であるのに対して、(12)は主観的表現であるという観点によれば、(11)と(12)の区別の説明は十分可能ではないだろうか。

そこで、遠慮ガチと遠慮ギミの使用状況についての調査を行った。表7に結果を示す。

表7 遠慮ガチ・遠慮ギミの使用状況

	遠慮ガチ	遠慮ギミ	計
聞蔵(朝日新聞社)	20(87.0%)	3(13.0%)	23
BCCWJ2009	79(96.3%)	3(3.7%)	82

この結果から、遠慮ガチは遠慮ギミに比べて非常に高い比率で使用されていることがわかる。これは、一部の辞書が遠慮ガチを形容動詞として扱っていることとも呼応する^{註10}。すると、八尾(2006)に従うならば、「遠慮」が窺える様子を表す場合、通常は遠慮ガチを使用するのだが、語気の和らげを示すという特別な理由があって遠慮ギミを使用している、ということになる。

いま、次例(13)(14)の「遠慮がち」を「遠慮ぎみ」に置き換えてみよう。果たして「話し手が断定を避け、語気を和らげようとする態度」が表れることになっているだろうか。

(13) 「いい、放っておけ」門野はいまいましげに言う。「でもそろそろ白井工業の脇田専務がお見えになる時間ですが」秘書が遠慮がちに言う。白井工業は県下では大手の会社であり脇田は次期社長を約束されている人物である。(「裁きの扉」)

(14) それでも、アメリカから帰ってすぐのころは、秋葉の目を気にして遠慮がちだったが、最近では平然とおかしな格好をする。(「化身」)

また、次例(15)(16)の「遠慮気味」を「遠慮がち」に置き換えると、遠慮ギミが持つ「断定を避け、

語気を和らげようとしている態度」が消える、と言えはやはり疑問が残るのではないか。加えて(15)では「少し遠慮気味に」のように遠慮ギミの状態の程度が低いことを表しており、遠慮ギミが「少し遠慮がちに」や「少し遠慮して」以上に語気を和らげるという説明には疑問が残る。

(15) 美和子はすぐに電話を終えたらしく、僕の部屋のドアをノックした。僕は自分の机に向かい、ぼんやりしているところだった。「穂高さんからだった」彼女は少し遠慮気味にいった。「うん、わかってるよ」と僕は答えた。 (「私が彼を殺した」)

(16) 納車直後に舐められたくない一心でアクセルをあけすぎて、その凄まじい加速に恐怖を覚えて萎縮してしまった。それからの数日は道路の端をおずおずとおとなしく遠慮気味に走っていた。 (「風転」)

さらに、ガチとギミが前接する共通語のうち使用頻度が高い「遅れる」(表2)を再び例に、(17a)の「遅れがち」と(18a)の「遅れ気味」をそれぞれ実際に置き換えて比較してみよう。

(17a) 気温はますます下がり始め、野村の足が遅れがちになってきた。 (「マークスの山」)

(17b) 気温はますます下がり始め、野村の足が遅れ気味になってきた。

(18a) 作業の進行がやや遅れ気味になると、レイ子は自分でいらいらしてヒステリーを起こす。 (「僕って何」)

(18b) 作業の進行がやや遅れがちになると、レイ子は自分でいらいらしてヒステリーを起こす。

遅れガチが足や進行が「遅れる事態が繰り返されている様子(頻度傾向)」を表すのに対し、遅れギミは「遅れる状態が一時的に現れ始めている様子(状態傾向)」を表す。このため、遅れギミにおいては八尾(2006)が挙げた、話し手が断定を避け、語気を和らげようとする態度を表す語気の和らげ機能を認めることはできないだろう。

以上の検討から、語気の和らげとは要するに断定を避けた婉曲のことであり、すると遠慮ガチにも語気の和らげは認められるのであり、特に遠慮ギミにだけそれを認めることには問題があると言わなければならない。

それでは、八尾(2006)が遠慮ガチに認めた「中立的な状態に比べると明らかに『遠慮』の様子」と遠慮ギミに感じた「はっきり『遠慮』と言えるほどではないが、遠慮に近い様子」との違いはどのようなものであろうか。それは奇しくも八尾(2006)が指摘している「主観性の含意」に属すると考えられる。しかし、それはガチの内容に対するマイナス評価というような話し手の評価的態度ではなく、「主観性の有無」に起因する。つまり、ガチの有する客観性が遠慮ガチの「中立的な状態に比べると明らかに『遠慮』の様子」として認められ、ギミの有する主観性が遠慮ギミの「はっきり『遠慮』と言えるほどではないが、遠慮に近い様子」として感じられたのである。下線は論者。

このように、ガチは話し手が客観的に観察したという態度を表す客観的表現であり、ギミは主観的に観察したという態度を表す主観的表現である。これは、ガチが主に動詞や助動詞に接続して頻度傾

向を表す場合が多く、自動詞や名詞に接続した場合に状態傾向を表すことから^{註11}、「遠慮」のようなサ変語幹においては、ガチの場合、サマ（様子）であってもコト（頻度）的に解釈され客観的表現へと通ずる。これに対し、ギミの場合、主に名詞や自動詞に接続して状態傾向を表し、そのサマ（様子）は断定できないがそれに近いものとして話し手が捉えていることから主観的表現へと通ずるのだと言える。

なお、状態傾向について付言すれば、形容詞の場合、「～め（目）」が「大きめ、少なめ、軽め、細め」のようにその性質・状態の程度が低い様子を客観的に表現するが、ギミは形容詞に接続することはない^{註12}。

5. 表記・挙例

5.1 表記

ガチとギミは、平仮名と漢字の表記（がち・勝ち、ぎみ・気味）が併用されているが、これはその出自と関係すると考えられる。井上（1998）は、ガチの出自が動詞「勝つ」の連用形であり、それが転成名詞「勝ち」になり、さらに接尾辞となったものであること、一方、ギミの出自は名詞「気味」であり、それが接尾辞となったものであり、「肺浸潤の気味がある」（「榆家の人びと」）といった名詞本来の用法が現在も残っていると述べている。

そこで、それぞれ動詞、名詞が出自である接尾辞のガチとギミの表記は、現在、どのような実態であるかについて調査を行った^{註13}。表8、図6に結果を示す。

表8 ガチ・ギミの表記

	ひらがな	漢字	計
ガチ	1,468 (98.1%)	28 (1.9%)	1,496
ギミ	241 (48.1%)	260 (51.9%)	501

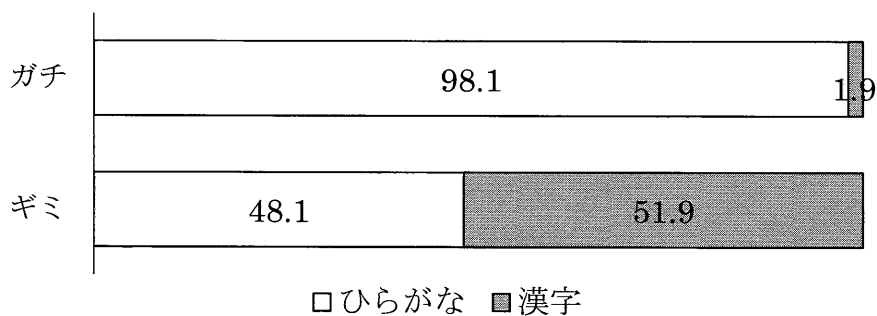


図6 ガチ・ギミの表記 単位 %

この結果から、ガチがほぼ平仮名表記されているのに対し、ギミは漢字表記と平仮名表記がほぼ同率で併用されていることが分かる。これは、例えば漢字表記が語彙的意味を表し、仮名表記が文法的意味を表す補助動詞の例からわかるように、漢字表記から仮名表記への移行は文法化の指標になるこ

とを勘案すれば、現在、接尾辞のガチにおいて仮名表記が主流であることはその文法化が進んでいる状況を示していると言える。すなわち、ガチは名詞の語彙的意味である「勝利」を表す際には漢字表記「勝ち」を使用し、接尾辞として文法的意味である「傾向」を表す際には平仮名表記「がち」を使用し、相補分布している。このため、次の用例中では(19)の漢字表記に違和感を覚える人が比較的多いのではないかとと思われる。

- (19) 何故か、TVカメラの前では、人びとは建前を語り勝ちなのです。 (「嗤う！」)
 (20) 日本人はおしなべてB1が不足しがちだといわれる。 (「薬屋さんで買える良薬事典」)
 (21) 小田原に着いたとき、正興は疲れたうえに、風邪気味だった。 (「江戸の遊歩術」)
 (22) ちょっとカゼぎみだったもんで、前の晩カゼ薬飲んでね。 (『笑い』の混沌)

ちなみに、表8の漢字表記「勝ち」28例中、著作者の生年と出版年が明らかな25例についてその平均を調べてみると、著作者は1920年代生まれ、出版は1997年であった。単純化して言えば、高齢の著作者が漢字表記「勝ち」を使用していることになる。したがって、このような語表記の実態の解釈については書き手の年代の影響も考慮しておかなければならない。

5. 2 挙例

先行研究ではガチとギミについて内実を明らかにし、その記述内容を支持する目的から用例を挙げているが、用例中には不適切なものが含まれていることがある。最後に、そのような例を取り上げて検討する。

まず、森田(1980)における、ガチが名詞に接続した挙例「雨がち、風邪がち、黒目がち、病気がち、伏目がち」のうち「風邪がち」について検討しよう。林(1993)の類語対比表をみると「風邪がち」という用法は不適當であるとしているが、実際、どうであろうか。

井上(2013)では、「病気」と「風邪」へのガチとギミの接続状況について全文検索型のデータベース『聞蔵(朝日新聞)』及び『日経テレコン21』の全期間検索(2007.5時点)、及びBCCWJ2009を用いた調査を行い、結果を表9のように示している。

表9 風邪ギミ・風邪ガチ・病気ガチ・病気ギミの頻度

	風邪ギミ	風邪ガチ	病気ガチ	病気ギミ
聞蔵(朝日新聞社)	545	0	1,077	2
日経テレコン21	1,367	1	2,391	1
BCCWJ2009	25	0	37	0
計	1,937	1	3,505	3

この結果から判断すると、「風邪がち」と「病気ぎみ」は用例数がそれぞれ1例と3例で非常に少ないため、適格表現とは認めがたいだろう。したがって、林(1993)の類語対比表の判断を認めて、

森田（1980）の挙例のうち「風邪がち」は除外することが望ましいとすることができる。

次に、グループ・ジャマシイ（1998）では「遠慮がち」と「伏し目がち」を慣用句とする一方で、「ありがちな」については「よくある」の意と説明するだけで慣用句として扱っていなかった（2.）。そこで、それらの使用状況についての調査を行った^{註14}。表10に結果を示す。

表 10 遠慮がち・伏し目がち・アリガチの使用状況

	遠慮がち	伏し目がち	アリガチ
がち(1,496例)	79 (5.3%)	13 (0.9%)	87 (5.8%)

この結果からは、既に述べたように一部の辞書が「遠慮がち」を形容動詞として扱っていることを考慮すれば、グループ・ジャマシイ（1998）において「遠慮がち」「アリガチ」を慣用句とすることには妥当性があると言える。一方、「伏し目がち」を慣用句とすることについては妥当性が認められないことになる。

6. まとめ

これまでがちとギミの接続・前後文脈・活用形式、そして傾向の意味として頻度傾向・状態傾向、主観的表現・客観的表現、表記・挙例等について、先行研究の記述内容を主に現代日本語の大規模コーパスを用いながら再検討してきた。以上の検討結果を表11（次ページ）に示す。

接続面の特徴としては、がちが接続する純粹名詞が限定的であるのに対し、ギミは語彙的意味の制約はあるが比較的自由に接続すること、がちが補助動詞に接続するのに対し、ギミは接続しないこと、がちが情態副詞に接続しないのに対し、ギミは接続することである。

次に、典型的な用例の前後文脈は、がちの場合、無意識や頻度を表す副詞「つい、とかく、しばしば」等と共に起して動詞「なる」、補助動詞「しまう」に接続し、後文脈に逆接の接続助詞、「実は」「実際には」等が出現するのに対し、ギミの場合、低程度を表す副詞「やや、少し」等と共に起してサ変語幹「不足」「興奮」等に接続し、後文脈に出現する順接・逆接の接続助詞にはがちのような特徴は見受けられない。

また、活用形式ではがちが述語・連体修飾成分を表す形式の使用率が高いのに対し、ギミは連用修飾成分を表すギミニの使用が多い点が話し手による判断の主観性との関係から注目される。

それから、意味に関しては、がちが頻度傾向を表し、動的で、客観的表現と言えるのに対し、ギミは状態傾向を表し、静的で、主観的表現であると言えることが確認された。

最後に、表記面では、がちがほぼ平仮名表記されているのに対し、ギミは漢字・平仮名が併用表記されていることが明らかとなった。

表 11 ガチ・ギミの検討結果

項目		ガチ	ギミ
接続	純粹名詞	△限定的：黒目、伏目、雨、岩…	○：貧血、ノイローゼ、円安…
	サ変語幹	○：接続する	○：接続する
	動詞	○：接続する	○：接続する
	補助動詞シマウ	○：接続する	×：接続しない
	態の助動詞	○：接続する	○：接続する
	情態副詞	×：接続しない	○：接続する
前方要素	品詞	動詞、助動詞、名詞	名詞、動詞、助動詞、副詞
	頻出語	なる、しまう、ある、遠慮…	不足、興奮、停滞、太る…
	共起語	つい、とにかく、どうしても…	やや、少し、ちょっと…
後方要素（接続助詞）		逆接＞順接	順接≒逆接
活用形式		ガチデ、ガチナ、ガチダ…	ギミニ、ギミデ、ギミノ…
意味	傾向（測定法）	頻度傾向（反復・頻発性）	状態傾向（変化・進行度）
	傾向性（割合）	○：強い	△：弱い
	他動詞・行為性	○：動的	△：静的
	判断／表現	主観性＜客観性→客観的表現	客観性＜主観性→主観的表現
機能	語気の和らげ	○：婉曲・間接的	○：婉曲・間接的
表記		平仮名＞漢字	平仮名≒漢字
先行研究の挙例		誤用：風邪がち、慣用句（形容動詞）：ありがち、遠慮がち	

7. おわりに

本稿では先行研究の記述内容について主に現代日本語の大規模コーパスを用いながら、再確認すべき点や問題が残ると思われる点を検討することにより、接尾辞ガチとギミの内実についての記述の精度をこれまで以上に高めることができた。今後、補助形容詞ヤスイやキライ、ッポイ、ゲとともに分析を行った先行研究についても量的研究の観点から再検討を行い、傾向表現の体系と構造を明らかにすることが課題として残されている。

注

1. Kekidze (2003) では表現の「やわらげ」機能の目的として、相手を傷つけないこと、言質を取られ自分自身が傷つかないことを挙げている。
2. なお、辞典類では編集方針や記述量の範囲内等の制約された中での記述になるため、十全な説明には紙幅上の限界があると思われる。
3. 逆接の用法以外に、前置きとしての用法も含む。

4. 用例(6)の場合、「いささか挑発気味だが、私は思いきって本心を切り出すことにした。」の「が、」を「いささか挑発気味だ。しかし、私は思いきって本心を切り出すことにした。」のようにすると不自然になる。このような例を逆接ではなく前置きとする。
5. 「実は、じつは、実際は」等が「ぎみだ・ぎみで」の後方要素に出現する比率は0.5%（190例中1語）に対し、「がちだ・がちで」の後方要素に出現する比率は5.9%（815例中48語）と高い。
6. ガチナの多くは「ありがちな」であり、ガチデ・ギミデの多くは連用修飾成分としてよりも「がちである・がちです、ぎみである・ぎみです」類の述語成分としての用例である。
7. 『聞蔵ビジュアル・フォーライブラリー』。朝日新聞が著作権を有する全文検索型の記事データベースをインターネット経由で利用できるサービス。1945年から1984年の朝日新聞縮刷版、1985年以降の朝日新聞、雑誌「週刊朝日」「AERA」の記事が検索可能（2007年時点）。調査対象とした期間は2006年9月1日から2007年2月末日の6ヶ月間。
8. 井上（1998:66）では、「～がちだ」が現れるヲ格構文は、主語と述語の結びつきを根幹とする文のコト（対象的な内容・言表事態）の描出に与る点で、受身・使役の助動詞と共通する。そして、〈頻度傾向〉とはそのようにして描出されたコトに対して考えられるものであったところから、コトと客観性とは結びつく。ところが、ヲ格ではなくガ格のみを支配する動詞の連用形に接続する「～ぎみだ」の場合、〈事態〉の描出ではなく〈状態〉の描出であってそれが受身・使役の助動詞をとらないこと（論者訂正：とらないこと→とることが少ないこと）、状態を表す名詞に接続することを通じ、それゆえ〈状態傾向〉を表すのであり、したがって主観性とも結びつくとしている。
9. ギミニとガチニの後続語についてみると、ギミニナル45（26.2%）、ギミニ+その他の被修飾語127（72.8%）、またガチニナル98（45.6%）、ガチニ+その他の被修飾語117（54.4%）であり、ギミニが連用修飾成分としてはたらく比率72.8%はガチニの54.4%と比べて高い。
10. 金田一（2010）は、「ありがち」「遠慮がち」を形容動詞とし、「伏し目がち」は語例として挙げている。一方、林（1984）は、「ありがち」を形容動詞とし、「遠慮がち」「伏し目がち」は「遠慮」「伏し目」の語例として挙げている。
11. 井上（2007）の『聞蔵』調査によると、ガチ・ギミの前接語の割合はそれぞれ名詞10.7%・69.1%、自動詞38.7%・19.4%、他動詞26.3%・5.7%、態の助動詞24.3%・5.7%、副詞0%・0.2%。
12. ギミは「がっかり・ゆったり・うっとり・あっさり」等の情態副詞に接続し、その性質・状態にある様子を表す。なお、形容詞には「～げ（気）」が接続して「うれしげ・悲しげ・少なげ・冷たげ」のようにそのような性質・状態の気配があることを表す。
13. BCCWJ2009の「国会議事録」コーパスは、表記のすべてを平仮名に統一している。
14. 調査対象とした表記は「遠慮がち・遠慮勝ち」「伏し目がち・伏目がち・伏し目勝ち・伏目勝ち」「ありがち・あり勝ち・有り勝ち」。

引用文献

井上次夫（1997）「容易性・傾向を表す『～やすい』の分析」『STDIUM』24、pp.98-113、大阪外国語大学大学院研究室

- 井上次夫 (1998) 「傾向を表す表現についてー～がちだ・～ぎみだ・～やすいー」『国文 研究と教育』
21、pp.62-74、奈良教育大学国文学会
- 井上次夫 (2007) 「傾向を表す『～がち』と『～ぎみ』ー朝日新聞記事検索データベース『聞蔵』を
資料としてー」国際シンポジウム「日本語研究と日本語教育研究の現状と課題」発表資料2007.6.
2、於北京日本学研究中心・北京外国語大学
- 井上次夫 (2013) 「接尾辞『がち』と『ぎみ』についてー日本語コーパスによる検討ー」『2013年度第
8回日本語教育学会研究集会予稿集』pp.27-32、於東北大学
- 金田一京助 (2010) 『例解学習国語辞典』小学館
- グループ・ジャマシイ (1998) 『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- 小池清治・小林賢次・細川英雄・山口佳也編 (2002) 『日本語表現・文型事典』朝倉書店
- 田忠魁・泉原省二・金相順 (1998) 『類義語使い分け辞典』研究社
- 林 巨樹 (1993) 『現代国語例解辞典』小学館
- 林 四郎 (1984) 『例解新国語辞典』三省堂
- 広瀬正宜・庄司香久子 (1994) 『日本語学習使い分け辞典』講談社
- 森田良行 (1980) 『基礎日本語2』角川書店
- 八尾由子 (2006) 「傾向を表す接辞 ガチ、ギミ、ヤスイ」『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』21、
pp.127-139.
- Kekidze Tatiana (2003) 「現代日本語における表現の『やわらげ』～『そうだ』『げ』『ぼい』などの
場合」『言葉と文化』、pp.293-306、名古屋大学大学院国際言語文化研究科

(いのうえ つぎお・本学教授)